

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H04094

研究課題名（和文）身体化された自己：ミニマルからナラティブへ

研究課題名（英文）The Embodied Self: From Minimal to Narrative

研究代表者

田中 彰吾（Tanaka, Shogo）

東海大学・文化社会学部・教授

研究者番号：40408018

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,700,000円

研究成果の概要（和文）：これまで、科学的アプローチに基づく自己研究は、自己を「ミニマル・セルフ」と「ナラティブ・セルフ」という二つの概念に区別した上で、主に前者をターゲットとして推進されてきた。本研究は、「身体性」に着目することで、研究の地平をミニマルからナラティブへと拡大することを目指したものである。研究の結果、両者を接続するモデル構築の要点として「身体的経験による記憶の裏付け」「物語実践の基礎にある身体的習慣」「一人称視点と三人称視点の身体的統合」を見出したことが主な成果である。これにより、身体性に根ざした仕方ナラティブ・セルフを研究する展望を開くことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「自己とは何か」という問いは我々誰にも関係する実存的なものである。過去約二〇年の間、自己の概念を「ミニマル・セルフ」と「ナラティブ・セルフ」に区別し、主に前者にアプローチすることで科学的自己研究が進められてきた。現状での課題は、これをいかに後者へと拡大し、我々の日常生活に密接に関連するナラティブ・セルフの次元を科学的に解明できるかにある。本研究は、その理論モデル構築において一定の成果を示した。ポイントは、(1)身体経験による長期記憶の裏付け、(2)物語実践が身体的習慣によって裏付けられていること、(3)物語の一人称視点と三人称視点とともに身体性に基礎を持つこと、を見出したことにある。

研究成果の概要（英文）：In the past two decades, scientific approach to the “self” has mainly focused on the idea of “minimal self,” being distinguished from the “narrative self.” According to this distinction, the minimal self has its basis in direct experience un-extended in time and composed of both senses of ownership and agency. In contrast, the narrative self is composed of diverse self-narratives extended in time, dealing with one’s past experiences and future prospects. The aim of this project was to establish the scientific approach to the self, expanding its focus from the minimal to the narrative with its emphasis on embodiment. During 4 years of research, we found three crucial points in establishing a new theoretical model; (1) autobiographical memories underpinned by embodied actions, (2) understanding narrativity in terms of embodied habit, (3) integration of the first-person perspective and the third-person perspective in memories and narratives.

研究分野：身体性哲学

キーワード：自己 ミニマル・セルフ ナラティブ・セルフ 身体化された自己 身体性

1. 研究開始当初の背景

本研究計画を申請した2019年当時、認知科学的な観点からの「自己」研究は一種の飽和状態に達しつつあった。それは次のような意味においてである。もともと「自己」は、意識や主観性と並んで哲学的かつ抽象的な主題であり、科学的研究の対象として扱われるようになったのは、イメージングを利用した脳研究が可能になった1990年代以降、特に2000年ごろに「ミニマル・セルフ (minimal self)」の概念が確立されて以降のことである。

ミニマル・セルフは「最小の自己」を意味し、今ここで生じている意識経験に付随している「私の経験」という暗黙の自己感を指す。哲学者S・ギャラガーの2000年の論文は、この自己感を、経験にともなう所有感 (sense of ownership) と、それを私が経験しているという主体感 (sense of agency) に区別し、それぞれを認知神経科学における運動研究の成果と関連づけて理解する展望を開いた。主体感と所有感は、いずれも行動実験と脳機能計測を通じて検証できる明確な要因だったため、科学的な実証研究がその後20年のあいだに大きく発展した (e.g. Haggard 2017, Tsakiris et al. 2007)。

ただし、こうした科学的な自己研究は、今ここで生起する身体経験に付随する所有感と主体感を認知神経科学的に解明する試みとして大きく進展したものの、それ以上のものを生み出すことがなかった。先のギャラガーの論文では自己は「ミニマル・セルフ」と「ナラティブ・セルフ (物語的自己)」という2種類に区別されていたのだが、実証科学の枠組みではナラティブ・セルフが追究されないままだったからである。

本研究が目指したのは、このような状況を打開する新たな理論モデルを構想することにあつた。ミニマル・セルフの概念を「身体化された自己 (embodied self)」という概念のもとで位置付けなおし、身体性の延長にナラティブ・セルフを支える物語性の次元を捉えようと試みるものだった。身体性の観点から見ると、「自己」という現象は、知覚と行為に基づく身体と環境の相互作用のある局面で切り出したものに他ならない。ここに言語を重ねて考えるなら、言語を介した身体と社会との物語的な相互作用を切り出したものがナラティブ・セルフと言えるのではないか。こうした見通しをもって本研究を開始した。

2. 研究の目的

こうした背景のもとで始まった本研究は、ミニマル・セルフとナラティブ・セルフ、身体性と物語性を架橋する理論モデルを構想することを目的として掲げた。

もともと「身体化された自己」は、身体と環境の相互作用から創発する主観的経験の全体を自己として捉える概念だったが、実験にうまく適合するミニマル・セルフの側面だけが実証的研究を介して推進されてきた。一方、ナラティブ・セルフは定量的な実験科学になじまないものと想定され、質的研究や理論的考察の対象にとどまってきた。本研究はこの状況を打破し、ナラティブ・セルフについて、将来の実証的研究の基礎となる理論モデルを創出することを目指した。自己を構成するナラティブ (物語) には、もともと、「他者に向かって自己を語る」という社会的環境における相互作用が含まれている。発達的にも、幼児が養育者に向かって経験を物語るようになるのがナラティブの最初の形態である (Bruner 1986)。発達の過程で、語りの宛先である他者が内面化され、自律的な自己内対話が成立することにより、より抽象的で一貫性のあるナラティブ・セルフが形成されると考えられる。

だとすると、ミニマル・セルフとナラティブ・セルフを連続的にとらえるうえで必要な観点は、ナラティブを支える時間性と他者性にあるだろう。この点を図とともに説明すると次の通りである。ミニマル・セルフは先に述べた通り、行為にともなう暗黙の主体感と所有感で構成されるものであり、身体的行為の系列のうち最小の時間幅 (現在) だけで成立しうる (図1)。

しかし、ここから反省的な自己意識が生成するには、(1)自己の経験について、その過去を回顧するとともに未来を展望するための時間性が必要であり、また、(2)自己の経験をメタレベルで反省することを可能にするような他者性 (自己経験に対する外部の視点) が必要である。ただし、こうして成立する反省的自己意識は、いまだ物語を生み出す段階には至らない。経験についての反省がナラティブを構成するには、現在の経験を過去の記憶との連続性において位置づけ、将来の展望のもとにそれを位置づける認知過程が必要になる。このような過程とともに成立しているのがナラティブ・セルフであろう (図2)。

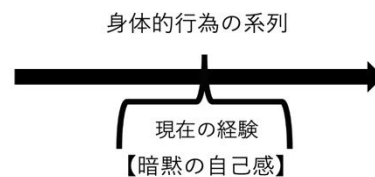


図1：ミニマル・セルフ

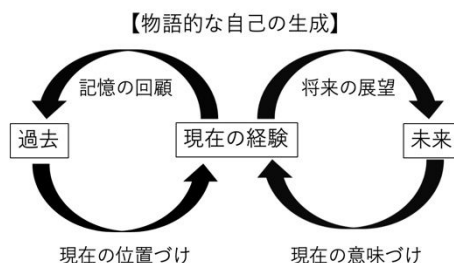


図2：ナラティブ・セルフ

本研究の目的は、以上のように図示できるナラティブ・セルフを、身体レベルで生じている経験と連続的に捉えることで、将来の科学研究を推進できる理論モデルにまで洗練させることにある。この目的のため、「身体図式 body schema」と「身体イメージ body image」という二種類の身体表象に着目して研究を進めた。両者は、認知神経科学において身体性を扱う場合にきわめて重要な概念である。身体図式が身体各部位の運動を協調させてスムーズな行為として統合する暗黙の感覚-運動的機能であるのに対して、身体イメージは、自己の身体についての知覚、概念、情動すべてを含む心的な画像である（Gallagher 2005）。身体図式は、感覚-運動的次元に根拠を持つため、暗黙の主体感や所有感についてはミニマル・セルフと連続的である。他方、身体イメージは、反省を介して自己身体を対象として把握する作用をとともなうため、自己イメージやナラティブ・セルフと連続的である。ただし、両者は密接に連動する機能を持つため、身体図式と身体イメージの両者に着目しつつ、ナラティブ・セルフの解明を進めることを試みた。

3. 研究の方法

(1)現象学的・理論的研究：哲学者のリクールは、人が自己の人生をストーリーとして語ることで、物語の主人公として自己アイデンティティを構築する様子を明らかにしている（Ricoeur 1990）。このような理解はナラティブ・セルフ論の源流として、社会的実践を通じて構築される文脈依存的な存在として自己を位置付ける社会構築主義的な見方を促進してきた。つまり、ナラティブ・セルフは社会的な構築物で実在的な基盤を持たないとする傾向が従来の理論には広く流布してきた。しかし、リクール自身も指摘している通り、語りはもともと身体的行為（発話）に根ざしており、主体が環境にかかわる際の一定の傾向性を反映する。ナラティブ・セルフは、社会的・対人的環境における行動の一貫性に裏打ちされる実在的な次元を備えているはずである。本研究では、この点について、メルロ＝ポンティの身体図式論の観点からさらなる理論的考察を進めることにした。社会構築主義的なナラティブ・セルフの見方を超えて、身体と環境の相互作用、その定型的パターンとしての習慣の延長線上に、語りの習慣とナラティブ・セルフを位置付ける理論モデルの構築を試みた。

(2)実験心理学的研究：従来のミニマル・セルフ研究では、自己感を所有感と主体感に区別して実験心理学的または認知神経科学的なアプローチに沿って解明してきた。他方、ナラティブ・セルフが語りによって構築される自己だとすると、その基盤には無数の自伝的記憶が存在するものと考えられる。それゆえ、科学的アプローチからナラティブ・セルフに迫ろうとする場合、身体性に由来する所有感および主体感と、自伝的記憶との関係が解明すべき問題の焦点として浮上してくる。そこで本研究では、従来の所有感や主体感に関連する実験研究の枠組みを拡大して、これら二つの要因と個人的経験の記憶との関連性を探索することを試みた。特に、主体感の指標として用いられてきたインテンショナル・バインディングや、所有感との関連が深いフルボディ錯覚の実験パラダイムを手がかりとして、これらと記憶との関連を探ることにした。

4. 研究成果

本報告書作成時点（2024年6月）で出版が完了している代表的な論文および書籍に沿って、本研究の成果を以下に報告する。

(A)ミニマル・セルフとナラティブ・セルフ

代表者の田中は著書『自己と他者』（2022年・東京大学出版会）の第六章において、ミニマル・セルフとナラティブ・セルフを架橋する理論的観点を指摘した。ミニマル・セルフは、あらゆる経験に付随する前反省的な自己感であるため、ナラティブ・セルフが構成される際の最初の契機として、経験についての反省的意識がどのように生じるかが説明されなくてはならない。また、ナラティブ・セルフは過去の記憶と将来の展望を一貫性のあるストーリーに沿って語ることで構成される自己アイデンティティである。それゆえ、語りを構成する言語、さらには自伝的記憶を整理する思考過程についての説明が必要となる。この点について、本研究の分担者も参加している共著『自己の科学は可能か』（2023年・新曜社）では、詳細な説明を試みた。反省的自己意識は決して抽象的な意識経験ではなく、哲学者メルロ＝ポンティ（1945）も指摘しているように、身体的基盤を持つ。「私が私を意識する」という反省の再帰的構造は、「私が私の身体に触れる」「私が私の声を聴く」という知覚レベルでの再帰的構造に起源を持つものである。また、自伝的記憶を整理する思考過程は、反実仮想的思考に根拠を持つ。自己の履歴を振り返り、将来を展望するさい、現在の自己に関連する反実仮想が加わることで、現実を総体として意味づける物語を構築し、そのストーリーの中に自己を位置付けることができるようになるのである。以上の通り、反省的意識と反実仮想的思考を経由して、ミニマル・セルフとナラティブ・セルフとを連続的に説明する理論的モデル（『自己の科学は可能か』）では一種の階梯モデルとしてこれを整理している）を提示した。

また、分担者の村田による論文「P.ゴルディのナラティブ論」（2020年）は、ナラティブ・セルフを考察するうえで不可欠な、自己経験を表象する「視点」の問題に取り組んでいる。ナラティブ・セルフを構成する自己経験の物語は、一人称的視点で経験されたことと、それをナレーターの三人称視点で表現することという視点の二重性を必ず伴う。哲学者シェクトマン（1996）のナラティブ・セルフ論では、過去の自己と現在の自己の連続性を保証するのは、両者がともに一人称的視点から生きられており、過去の自己についても一人称的アクセスが可能であるときに現在との連続性が保たれるとされている。しかしゴルディによると、視点の一人称性は自己の連

続性にとって必要条件でも十分条件でもない。村田はこの議論を踏まえ、過去と現在の自己の統合を可能にするのは、むしろナレーターの三人称視点による物語全体の有意味な取りまとめではないかと指摘している。視点の問題は従来のミニマル・セルフ論では十分に論じられておらず、ミニマルとナラティブを結ぶ理論を充実させる上で、今後さらに究明が必要になる論点である。

(B)身体性と物語性

分担者の宮原と代表者の田中は、2023年に共著論文「Narrative self-constitution as embodied practice」を『Philosophical Psychology』で刊行した。本論文は、身体と環境の相互作用を通じて形成される「習慣」に着目し、習慣の延長線上に形成される物語実践を通じてナラティブ・セルフが構成されることを明らかにしたものである。自己をめぐる身体性と物語性の関係については、R・メナリーによる2008年の論文「Embodied narrative」を始めとして、2010年代に一定数の論文が刊行されている。それらによると、身体性が物語性にボトムアップに影響を与えるとする一方向的な見方と（例えば Menary 2008）、そうした基礎付け関係だけでなく物語が逆に身体性に対してトップダウンに影響を与えるとする双方向的な見方がある（例えば Dings 2019, Mackenzie 2014 など）。ただし、いずれの見方を取る場合も、物語性そのものは、経験された出来事を一定のストーリーのもとで取りまとめる高次認知過程として理解されており、身体性から切断されているという理論的問題点があった。そこで本論文では、物語性それ自体を身体性と連続的に捉えることを提案した。物語とは本来「物語る」という行為であり、行為が埋め込まれた具体的状況と不即不離の関係にある。習慣が、特定の状況に対して特定の行為によって問題を解決するのと同様に、「物語る」という行為もまた、特定の状況に対して特定の仕方でも状況を意味づけて理解することによって問題を解決することとして理解できる。だとすると、身体的行為を通じて定型的状況に適応する能力が「習慣」であり、発話的行為を通じて物語的状況に適応する能力が「物語実践」であるということになるだろう。本論文では、このような理解を提示し、身体性と物語性を架橋し、ナラティブ・セルフを身体性の次元から理解する理論的方途を示した。

他方、分担者の今泉は『自己の科学は可能か』第二章で、所有感および主体感と物語性の関係を解明することに取り組んでいる。所有感と主体感はいずれもミニマル・セルフの構成要素であり、従来は数百ミリ秒の短時間スケールのもとで解明が進められてきた。だが、例えば視点を身体外部に誘導した体外離脱錯覚下での知覚的経験は長期記憶に定着しにくいことが研究により明らかになっている（Bergouignan et al. 2014）。つまり、身体所有感が低下した状態で知覚された体験内容は、ナラティブを構成する長期記憶にはなりにくいことが示唆されている。あるいは、実験参加者の実際の手の動きに時間的遅延や方向反転を加えた映像をモニターに提示して視覚的フィードバックを与えると、実際の手の動きと同じフィードバックを与える場合に比べて、後に再認されにくくなる（Sugimori & Asai 2015）。つまり、主体感が伴う状態での身体運動のほうが長期記憶として記録されやすい傾向が見られるということである。なお、今泉自身もこの点をさらに追究すべく、主体感と刺激語の再認の相関について実験研究を行ったが、主体感を伴う刺激について必ずしも再認成績が向上するとの事実は見出されなかった（Tsuji & Imaizumi 2022）。研究の全般的方向として、所有感や主体感の伴う状態での経験が長期記憶として定着しやすいとの仮説を立てることはできそうだが、その検証はさらに慎重に進める必要がある。これは、身体性と物語性が連続するポイントをどこに見出すかという論点とも相まって、さらに検討が必要であることを示唆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 5件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 Tanaka Shogo	4. 巻 未定
2. 論文標題 Hand to Face: A Phenomenological View of Body Image Development in Infants	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12517	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyahara Katsunori, Tanaka Shogo	4. 巻 未定
2. 論文標題 Narrative self-constitution as embodied practice	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Philosophical Psychology	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09515089.2023.2286281	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mariia Shuvalova, Shogo Tanaka	4. 巻 31
2. 論文標題 Self-identity in a virtual space: Consideration from an embodied perspective	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Civilization	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 30(2)
2. 論文標題 間身体性の観点から障害者スポーツを通じた「つながり」を考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スポーツ社会学研究	6. 最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中彰吾, 森直久	4. 巻 4
2. 論文標題 間身体性から見た対面とオンラインの会話の質的差異	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こころの科学とエピステモロジー	6. 最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyahara Katsunori, Segundo-Ortin Miguel	4. 巻 200
2. 論文標題 Situated self-awareness in expert performance: a situated normativity account of riken no ken	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Synthese	6. 最初と最後の頁 192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11229-022-03688-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tsuji Nanami, Imaizumi Shu	4. 巻 12
2. 論文標題 Sense of agency may not improve recollection and familiarity in recognition memory	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 21711
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-022-26210-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 IRIKI Atsushi, SUZUKI Hiroaki, TANAKA Shogo, BRETAS VIEIRA Rafael, YAMAZAKI Yumiko	4. 巻 63
2. 論文標題 THE SAPIENT PARADOX AND THE GREAT JOURNEY: INSIGHTS FROM COGNITIVE PSYCHOLOGY, NEUROBIOLOGY, AND PHENOMENOLOGY	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA	6. 最初と最後の頁 151 ~ 173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2117/psychoc.2021-B017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 50(7)
2. 論文標題 現代の現象学と精神医学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 727-732
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 啓介、宮原 克典	4. 巻 73
2. 論文標題 特集 意識 . ヒトを対象とした実験的アプローチ 身体的自己意識の認知科学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生体の科学	6. 最初と最後の頁 13~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.2425201457	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 112
2. 論文標題 『フェミニスト現象学における時間』を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東海大学紀要・文学部	6. 最初と最後の頁 61-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yochai Ataria, Shogo Tanaka	4. 巻 43
2. 論文標題 When body image takes over the body schema: The case of Frantz Fanon	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Human Studies	6. 最初と最後の頁 653-665
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10746-020-09543-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 90
2. 論文標題 自己と他者を区別する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理学ワールド	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tagami, U., & Imaizumi, S.	4. 巻 11
2. 論文標題 No correlation between perception of meaning and positive schizotypy in a female college sample	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2020.01323	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyahara, K., & Robertson, I.	4. 巻 40
2. 論文標題 The pragmatic intelligence of habits	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Topoi	6. 最初と最後の頁 online first
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11245-020-09735-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 18
2. 論文標題 H. ベルクマンの内的知覚論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 19-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計43件（うち招待講演 26件 / うち国際学会 11件）

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Hand to Face: Body Image Development Embedded in Social Interactions
3. 学会等名 Workshop: Cultural Embedding of Social Cognition (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 対面とオンラインの会話の質的差異
3. 学会等名 シンポジウム「対話空間のオラリティ：オープンダイアローグ、当事者研究、相互行為をめぐって」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 自己の階梯 - 前反省から反省へ、身体から物語へ
3. 学会等名 シンポジウム「自己の科学は可能か - 心身脳問題として考える」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 「生きられた身体」による運動学習 - 身体図式と身体イメージの違いから考える
3. 学会等名 日本認知科学会・知覚と行動モデリング (P&P) 研究分科会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体のプロジェクションと自己の進化
3. 学会等名 2023年度日本認知科学会第40回大会 OS-11「自己と身体の相互構築とプロジェクション」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体図式から見た認知の能動性
3. 学会等名 2023年度日本認知科学会第40回大会 OS-9「認知の能動性 - ゲシュタルト心理学、環世界、状況依存性...を切り口として」(招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 対面とオンラインの会話の質的差異から考えるオンライン授業の意義
3. 学会等名 北海道大学研究集会2023「ポストコロナ時代の言語教育におけるオンライン授業と翻訳AI・生成AIへの対応に関する研究」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 パラスポーツを通じた他者理解と共生社会
3. 学会等名 日本財団パラスポーツサポートセンター・パラリンピック研究会・第42回ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Possibilities for Phenomenological Cognitive Science
3. 学会等名 IHSRC 2023 Tokyo, Symposium A: Another History of Psychology: From a phenomenological perspective (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体性認知からサピエント・パラドックスを考える
3. 学会等名 科学基礎論学会2023年度総会・特別講演 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 「情解」と「知解」をめぐって
3. 学会等名 2023年度人工知能学会全国大会 OS-28 「知・情・意 - AIが人間研究になるための枠組み」 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Intercorporeality in online conversations
3. 学会等名 Workshop: Experiences of Social Distancing during the Covid-19 Pandemic (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Narrative self-constitution as an embodied practice
3. 学会等名 Lecture at the University of Memphis (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 認知科学における身体性 - これまでとこれから
3. 学会等名 東海大学文明研究所公開シンポジウム「人文学における身体性をめぐって」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 あいたの一回性と規範性
3. 学会等名 日本現象学会2022年度研究大会・ワークショップ「パフォーマンスの現象学」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Embodied Cognitive Evolution behind the "Sapient Paradox"
3. 学会等名 International Conference on Embodied Cognitive Science (ECogS 2022) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 現象学的認知科学の可能性
3. 学会等名 日本質的心理学会第19回大会・公募シンポジウム「現象学的人間科学の現段階」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体性とナラティブから考える「生きにくさ」
3. 学会等名 第20回日本神経心理学療法学会学術大会・共催シンポジウム「身体性変容から生きにくさを探る」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 On the spiritual dimension of embodied experiences
3. 学会等名 Tokai University Online Symposium: "Embodied Spirituality" (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 科学的な自己研究を拡張する - ミニマルからナラティブへ
3. 学会等名 日本心理学会86回大会・公募シンポジウム「ナラティブ・セルフをどう研究するか」2022年9月9日
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Intercorporeality mediated by online meeting software: An observational study
3. 学会等名 39th International Human Science Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunori Miyahara
2. 発表標題 Narrative self-constitution as an embodied skill
3. 学会等名 Mind in Skilled Performance: Conference and Roundtable (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunori Miyahara
2. 発表標題 Habits and narrative selfhood
3. 学会等名 Tokyo Forum of Analytic Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunori Miyahara
2. 発表標題 Habits and narrative selfhood
3. 学会等名 st Hokkaido-Tartu Philosophy Workshop (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 共感的アクセスと劇的アイロニー
3. 学会等名 日本心理学会86回大会・公募シンポジウム「ナラティブ・セルフをどう研究するか」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 間身体性から紐解くパラリンピック
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会第31回大会・トークセッション「パラリンピックを学際的に紐解く」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 対人恐怖症からTaijin-Kyofushoへ
3. 学会等名 第9回顔・身体学領域会議(新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 現代の現象学と精神医学
3. 学会等名 第87回Philosophy of Psychiatry & Psychology研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 直接経験を超越する質的心理学に向けて
3. 学会等名 第2回人間科学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 ランドスケープを考える 自然を生きる人間の想像力
3. 学会等名 東海大学文明研究所「文明間対話」サテライト・シンポジウム「環境と文明」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体性哲学から見たeスポーツの特徴
3. 学会等名 日本応用哲学会第13回年次研究大会シンポジウム「eスポーツと応用哲学」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 これからのナラティブ・セルフ研究を構想する
3. 学会等名 オンラインシンポジウム「自己研究の此岸と彼岸」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 1970年代の日本文化論に見る対人恐怖症
3. 学会等名 第8回顔・身体学領域会議（新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻菜々実・今泉修
2. 発表標題 主体感が再認の回想過程と熟知性過程に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 ブレンターノ1884/5年講義「基礎論理学とそこに必要な刷新」について
3. 学会等名 第20回フッサール研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 From body-as-subject to body-as-object
3. 学会等名 54th Annual Philosophy Colloquium "What ' s Next: The Future of Embodiment"（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体性から考える
3. 学会等名 VRユース x アカデミック「第三種接近遭遇」(第3部)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 二つの神経病理事例から運動学習を考える
3. 学会等名 第41回 バイオメカニズム学会学術講演会・シンポジウム「感覚運動学習のバイオメカニズム」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 On the concept of embodied knowledge
3. 学会等名 The Embodiment Conference 2020 (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 間身体性から見た対面とオンラインの会話
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会, 公募シンポジウム「ネットメディアの生態心理学」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 現象学の立場から：ポスト身体性認知としてのプロジェクション
3. 学会等名 日本認知科学会第37回大会0S 「プロジェクション科学の基盤拡充を目指して」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体性から考えるミニマル・セルフとナラティブ・セルフ
3. 学会等名 2020年度「顔・身体学」第2回心理班若手勉強会(新学術領域研究「新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 フッサールの時間論 および体験流の即自の構成
3. 学会等名 第59回自他表象研究会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 田中 彰吾、今泉 修、金山 範明、浅井 智久、弘光 健太郎	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 224
3. 書名 自己の科学は可能か	

1. 著者名 田中彰吾・今泉修・金山範明・弘光健太郎・浅井智久	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 224
3. 書名 自己の科学は可能か：心身脳問題として考える	

1. 著者名 嶋田 総太郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 288
3. 書名 認知科学講座1 心と身体（担当：田中彰吾・第8章「身体性に基づいた人間科学に向かって」pp.231-264）	

1. 著者名 荒畑 靖宏、吉川 孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 あわれを哲学する（担当：村田憲郎「体験の一回性について」pp.69-84）	

1. 著者名 田中 彰吾	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 232
3. 書名 知の生態学の冒険 J・J・ギブソンの継承3 自己と他者	

1. 著者名 能智 正博、大橋 靖史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 328
3. 書名 ソーシャル・コンストラクショニズムと対人支援の心理学（担当・第二章「現象学的心理学の立場から」）	

1. 著者名 Yochai Ataria, Shogo Tanaka, Shaun Gallagher (Eds.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 353
3. 書名 Body Schema and Body Image: New Directions (担当: Shogo Tanaka - Chapter 5: Body schema and body image in motor learning: Refining Merleau-Ponty's notion of body schema)	

1. 著者名 Christian Tewes, Giovanni Stanghellini (Eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 400
3. 書名 Time and Body: Phenomenological and Psychopathological Approaches (担当: Shogo Tanaka - Chapter 8: Body-as-object in social situations: Toward a phenomenology of social anxiety)	

1. 著者名 佐藤公治, 田中彰吾, 篠原和子, 本田慎一郎, 玉木義規, 中里瑠美子, 三上恭平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 協同医書出版社	5. 総ページ数 196
3. 書名 臨床のなかの物語る力：高次脳機能障害のリハビリテーション（担当：レクチャー：「私」の多様なありかた）	

1. 著者名 鈴木宏昭編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 近代科学社	5. 総ページ数 256
3. 書名 プロジェクト・サイエンス：心と身体を世界につなぐ第三世代の認知科学（担当：共著，範囲：2章 「ポスト身体性認知としてのプロジェクト概念」(pp. 39-57)）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

田中彰吾の心理学 & 哲学研究室 http://embodiedapproachj.blogspot.com/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮原 克典 (Miyahara Katsunori) (00772047)	北海道大学・人間知・脳・AI研究教育センター・特任講師 (10101)	
研究分担者	浅井 智久 (Asai Tomohisa) (50712014)	株式会社国際電気通信基礎技術研究所・脳情報通信総合研究所・主任研究員 (94301)	
研究分担者	今泉 修 (Imaizumi Shu) (60779453)	お茶の水女子大学・人間発達教育科学研究所・准教授 (12611)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	村田 憲郎 (Murata Norio) (80514976)	東海大学・文学部・教授 (32644)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 40th International Human Science Research Conference	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 40th International Human Science Research Conference	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Tokai University Online Symposium: “Embodied Spirituality”	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関